

# 寺江圭一郎《ケーマゲヒンマゲ》プロジェクト (長崎県壱岐島、2019-20年) 報告

花 田 伸 一

Report on the Art Project “Ke-Mage Hin-Mage”  
by Kei-ichiro Terae (Iki Island, Nagasaki Prefecture, Japan, 2019-20)

Shin-ichi HANADA

## 要 旨

美術家・寺江圭一郎によるアート・プロジェクト《ケーマゲヒンマゲ》(長崎県壱岐島、2019～20年)に関する報告。

本プロジェクトは、長崎県が県内の離島振興を目的に2018年度より展開している文化芸術事業『長崎しまの芸術祭』中、筆者が企画協力・監修として携わった壱岐島でのアーティスト・イン・レジデンス事業『アーティスト・イン・アイランド@壱岐2019：ことばのかたち』の一環として行われた。

2度の下見・調査を経て寺江は2019年12月～2020年1月に壱岐島に滞在し、最終的に芦辺地区において三味線に関する行事の提案をするという着地点に至った。

本稿では本プロジェクトの三つの大きな構成要素である「ホームページ」「現地滞在」「イベント提案」について報告し、本プロジェクトの成立背景について考察を加える。

## ■はじめに

本稿は長崎県壱岐市にて2019年度に美術家・寺江圭一郎(1981年生、広島出身・東京在住)が取り組んだアート・プロジェクト《ケーマゲヒンマゲ》(以下、本プロジェクト)についての報告である。本プロジェクトは長崎県内の離島各所で開催されている『長崎しまの芸術祭』のうち、壱岐島で行われたアーティスト・イン・レジデンス事業『アーティスト・イン・アイランド@壱岐2019：ことばのかたち』の一部として行われたも

のであり、筆者はキュレーターとして本プロジェクトに携わった。

## ■『長崎しまの芸術祭』

『長崎しまの芸術祭』は離島振興を目的とした文化芸術事業であり、長崎県文化振興課を主管として文化庁「文化芸術創造拠点形成事業」補助金および国土交通省「離島活性化交付金」を主な財源としながら2018年度より取り組まれている。長崎県ホームページ中「長崎しまの芸術祭」ページ

の案内文には次のように記されている。

文化芸術により離島振興や若者人口の定着、交流人口の拡大を図るため、平成30年度から実施し、今年度（筆者注：2019年度）で2年目を迎えます。各離島地域の実行委員会が主体となり（中略）海外アーティストによる地元の素材を使ったアート作品の創作や地元の人々との交流、創作作品の展示など多彩な文化芸術イベントを開催しております。<sup>1</sup>

この趣旨のもと離島ごとに長崎県と各自治体および民間を交え実行委員会が組織され、音楽・美術・映画・ダンス等のプログラムが行われる。そのうち壱岐島と奈留島では2018年度から、小値賀島では2019年度からアーティスト・イン・レジデンス事業「アーティスト・イン・アイランド」が行われており、筆者は2019年度の壱岐島での同事業に企画協力・監修者として携わった。

## ■『アーティスト・イン・アイランド@壱岐』

同芸術祭の壱岐市での事業運営に当たるのは「壱岐しまの文化芸術活動推進実行委員会」で、その構成員は壱岐市政策企画課職員、県立高校美術教員、自営業者ほか。

長崎県とフランス領事館との繋がりから、2018年度には壱岐島ではアンスティチュ・フランセ関西による紹介で、映像作家1名（ジュスティエヌ・エマル [1987年生、Justine Emard]）とバンド・デシネ作家2名（ヴァンサン・ルフランソワ [1966年生、Vincent Lefrançois]、トニー・マナン [1990年生、Tony Manent]）による滞在および作品展示が行われた。

筆者が監修の相談を受けた2019年2月頃には、2019年度にも引き続きアンスティチュ・フランセ関西による紹介でバンド・デシネ作家2名（カトリーヌ・ムリス [1980年生、Catherine Meurisse]、

ヴァンサン・ルフランソワ）の招待が決まっていた。

その2名に加え、2019年2月末頃、筆者の提案でグウ・ナカヤマ（1975年生、書家）と寺江圭一朗の2名に本事業への参加をお願いした。

ナカヤマは壱岐市出身・在住の書家で、積極的に島外での発表活動を展開していることから氏の参加によって本事業の島内外の交流促進が期待できることと、2018年度の実行委員として大きく協力してきた経緯もあり本事業の運営には地元の意欲ある表現者による協力体制が欠かせないことから参加をお願いした。

寺江は筆者企画の『ながさきアートの苗プロジェクト2010in伊王島』（長崎市、2010年）において長崎県内の伊王島でアーティスト・イン・レジデンス事業をともにした経験と、同じく筆者企画『千草ホテル中庭 PROJECT—アート・ホスピタリティ—vol. 15寺江圭一朗展「アートがなにかをたずねる」』（北九州市、2014年）において一般の人々との共同制作をともにした経験から参加をお願いした。

## ■『アーティスト・イン・アイランド@壱岐 2019：ことばのかたち』

以上、カトリーヌ・ムリス、ヴァンサン・ルフランソワ、グウ・ナカヤマ、寺江圭一朗の4名を出品作家として2019年3月に企画書をまとめた。

4名の表現のスタイルは、バンド・デシネ、書、現代アートと各人各様であるが、バンド・デシネと書が「絵」と「字」の共存によって成立する点、寺江が過去作品において言葉の通じない相手とのコミュニケーションの可能性／不可能性を探っていた点を考えれば、4名ともイメージと言語（書き言葉・話し言葉）の領域を往来しながら創作する点において共通していた。

また4名の出自を考えると、日本語を話せない外国人（ムリス）、日本語を話せる外国人（ルフランソワ）、島外在住の日本人（寺江）、地元在住

<sup>1</sup> <https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kanko-kyoiku-bunka/bunka-geijutsu/islands-art-festival/>（2020年2月10日閲覧）

の日本人（ナカヤマ）という組み合わせで、アーティスト・イン・レジデンス事業において無視できないコミュニケーションの問題、さらに踏み込んで言えばディスコミュニケーションの問題を再考するに示唆深い布陣であった。

以上の点をふまえ、事業全体のテーマを「ことばのかたち」(Form of Language) とし、企画書の説明に次のように記した。

私たちは一人では生きられない社会的な動物である。私たちはお互いに気持ちや考えを伝え、受け止めあいながら生活を送っている。そのときに私たちは文字や言葉、さらに記号や象徴を通して情報をやり取りするが、そもそも他者と気持ちや考えが通じるとはどのようなことなのか。情報が正確に伝わることは常に望ましいことだろうか。芸術の世界では「美しい誤解」という言葉もある。いったい誤解の何が美しいのだろうか。

このたびの壱岐のアート・プロジェクトでは、現代アート、バンド・デシネ（漫画）、書などを通じて地域の皆さんと「ことばのかたち」を探りながら、その起源や豊かさをともに体験できるような機会としたい。<sup>2</sup>

ただし、筆者のいつもの進め方と同じく、作家達には特に展覧会テーマには縛られず、あくまで自身の関心や問題意識を優先しながら創作に臨んでほしいという断りのもと準備を進めた。

結果、ムリス、ルフランソワ、ナカヤマがバンド・デシネや書など、モノとして形ある作品をギャラリーに並べるオーソドックスな展覧会の形に結実したのに対し<sup>3</sup>、寺江の場合、プロジェクトとして展開され、かつ最終的に「提案」という形に着地したので、モノとして形ある作品が残って

いない。したがって以下、壱岐島での寺江の取り組みについて記録を残すことが本稿の主題となる。

## ■寺江圭一朗《ケーマゲヒンマゲ》プロジェクト：立ち上げまでの経緯

寺江が現地調査やプロジェクト展開のために壱岐島に滞在したのは以下の3回。

1回目〔下見〕：

2019年4月27日（土）～28日（日）

2回目〔調査〕：

2019年9月12日（木）～23日（月）

3回目〔本番〕：

2019年12月12日（木）～2020年1月16日（木）

1回目は筆者も同行し、ひとまずの下見および現地実行委員との顔合わせ程度。

2回目は寺江のみの滞在調査。島内の歴史・伝承・地理的特徴、各地域の状況や課題などについて、より踏み込んだリサーチを経て、9月下旬に作品プラン《ケーマゲヒンマゲ》プロジェクトが提案された。

「ケーマゲヒンマゲ」とは壱岐島の方言で「物事を急造する」との意味<sup>4</sup>。《ケーマゲヒンマゲ》プロジェクト<sup>5</sup>は島内に仮設の拠点を構え、そこで地域住民との関わりの中から何らかの活動を立ち上げていこうとするもの。その活動拠点や滞在场所を確保するべく筆者や実行委員にて10月から11月にかけて調整するも思うように進まず、なかなか拠点を確保できない状況が続くなかでアレンジ案や代案を立てつつ準備を進めた。結果的には本番滞在を目前に控えた12月上旬、プロジェクトのホームページが寺江によって作成・開設され、本番滞在中の経過をリアルタイムで情報発信しながら、インターネットと連動したプロジェクトを

<sup>2</sup> 『アーティスト・イン・アイランド@壱岐2019：ことばのかたち』企画書（2019年3月19日 筆者作成）より

<sup>3</sup> 『グウ・ナカヤマ個展「ENVY 2019」』…会期：2019年12月23日（月）～2020年1月19日（日）、会場：小金丸幾久記念館2Fアートギャラリー、入場無料、出品内容：書作品8点。

『カトリーヌ・ムリス+ヴァンサン・ルフランソワ展』…会期：2020年1月1日（水祝）～1月16日（木）、会場：壱岐市立一支国博物館3F多目的交流室、入場無料、出品内容：ムリス新作10点+ルフランソワ作品24点（新作4点+旧作15点+原画5点）。

<sup>4</sup> 竹下力雄著『郷土史わたら』（自費出版）より。森村旦編『壱岐島方言辞典』（葦書房、1986年）には「いい加減適当に処理する」との意味で「ひんまげけーまげ」とも。

<sup>5</sup> このプロジェクト名は本プロジェクト含め、特に2000年代以降、国内外で展開される芸術祭の多くが十分な準備期間・人員・予算の確保がなされないまま急ごしらえされる状況をふまえてもいる。

島内で展開する方針となった。この時点では滞在中どのような形でプロジェクトが着地するのかは不確定である。

ホームページ「ケーマゲヒンマゲ」の導入文に、

この作品は、ウェブ・現地滞在・イベント提案の三つの柱でできています。その活動を通し、社会を志向する芸術が持つ公共性の問題に着目しようとしています。<sup>6</sup>

とある通り、本プロジェクトは大きく3つの要素で構成されている。以下、それぞれ具体的に見ていこう。

## ■ホームページ「ケーマゲヒンマゲ」

2019年12月上旬に寺江により制作・公開され、滞在中毎日更新されたプロジェクトのホームページ。以下の内容より構成される。

### ○「[ケーマゲヒンマゲ]とは」



トップページにプロジェクトの概要が記されているが、途中、

壱岐に「ケーマゲヒンマゲ」という仮設のお店のまうなものをつくり、そこを拠点として創造的な対話や制作活動を試みるプロジェクトです。<sup>7</sup>

というように説明文の上から取り消し線が引かれ、そこに文字色を変えて（地の文は黒、以下の文はピンク）、

（という予定でしたが場所がなく、滞在しながら準備を進めることになりました。さてどうなるのやら。制作ノート・ニュースで日々更新していきます!）<sup>8</sup>

と続くことから、閲覧者はプロジェクトが現在進行形で展開していく緊迫した様子、つまり《ケーマゲヒンマゲ》プロジェクトの文字通りの「急造」感をトップページから感じ取ることになる。

### ○「見る・参加する」

このページでは、「イベント」情報として広報物作成時（2019年11月）に予定を組んでいた「アーティスト・トーク」や本プロジェクトの着地点として行った「上映会」（後述）情報のほか、ホームページ開設当初に「ワークショップ・イベントなどの提案例」として、地域住民からの要望に応じて取り組みそうな3つの活動例が掲載された<sup>9</sup>。

#### 1)「アーティスト像」

人々がアーティストに対して抱いているイメージを人形で表現してもらおうワークショップ<sup>10</sup>。



<sup>6</sup> <https://iki.plus100 p.com/>（2020年2月10日閲覧）

<sup>7</sup> 同上

<sup>8</sup> 同上

<sup>9</sup> [https://iki.plus100 p.com/?page\\_id=83](https://iki.plus100 p.com/?page_id=83)（2020年2月10日閲覧）

<sup>10</sup> 筆者企画『千草ホテル中庭 PROJECT-アート・ホスピタリティ-vol.15寺江圭一朗展「アートがなにかをたずねる」』（北九州市、2014年）において実施したもの。

## 2) 「焼きたてのぐい飲みで飲む」

土鍋に用いられる土でぐい飲みを作り壱岐焼酎を飲むワークショップ。



## 3) 「ひきとおし」

大事な客に振舞っていたという壱岐島の郷土料理「ひきとおし」鍋を作り囲む食事会。

結果的には今回の滞在中にこれらの活動を実際に行う機会は無かったが、いずれもモノの完成度や飲食だけが問題なのではなく、それらの活動をきっかけに住民と対話する機会、島内外の人々の交流を促す機会を設けることが重要であり、そこからさらに、社会の中の芸術の立ち位置を探ったり、食を手掛かりに地域の状況を掘り下げたりすることが本来の趣旨である。

## ○ 「ケーマゲヒンマゲして考えたこと」



この項目では滞在前から滞在中にかけて、寺江の考えが時折綴られ、計8ページが作成された。記事タイトル及び更新日は次の通り。「いい加減なことを言うことができる関係について」(2019

年12月9日)、「郷土史」(2019年12月9日)、「郷土史」(2019年12月9日)、「ヨソモノ」(2019年12月10日)、「一つ目の活動」(2019年12月13日)、「ひんまげけーまげ」(2019年12月16日)、「魔除けとしての公共」(2019年12月21日)、「混乱から抜け出し、そしてもう一度モヤっとする」(2019年12月24日)、「芦辺浦2030年1月吉日 三味線通り」(2020年1月11日)。地域と芸術の関わりを発端として、郷土史、公共性、環境、経済などの話題に触れられている<sup>11</sup>。

## ○ 「今日の」



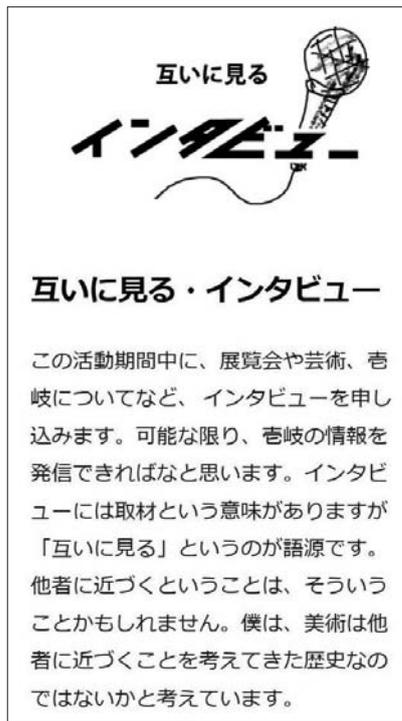
滞在初日の2019年12月12日(木)から滞在最終日の2020年1月16日(木)までの合計36日間分、日々の活動についての記録が1日1ページずつ毎日追加された。朝9時までにはその日の予定が発表され、深夜0時までには同ページ内でその日の報告がなされる仕組み<sup>12</sup>。

「今日の」シリーズがプロジェクトに関する活動の記録、「ケーマゲヒンマゲして考えたこと」シリーズがその時々の思考の記録、という区分ではあるが、「今日の」シリーズにおいても日々の考察や構想の断片などが多く記されており、両者の区分は必ずしも明確ではない。

<sup>11</sup> <https://iki.plus100p.com/?cat=9> (2020年2月10日閲覧)

<sup>12</sup> <https://iki.plus100p.com/?cat=12> (2020年2月10日閲覧)

## ○ 「互いに見る・インタビュー」



このページでは寺江が滞在中に関わりのあった住民にインタビューし、収録した下記4つの音源がアップされた<sup>13</sup>。

- 1) 筆者…初回は寺江の提案により滞在中の直前の2019年12月12日（木）に筆者との対談を収録したものの、音源に不具合があったため書き起こしによる公開となった。主に地域と芸術の関わりについて話している。
- 2) 「たちまち」メンバー…壱岐島芦辺地区で空き家活用、子どもたちの居場所作り、地区情報発信などの活動に取り組むグループ「たちまち」のメンバーから篠崎竜大氏、篠崎千恵美氏、平山健人氏、平山みずき氏へのインタビュー。コミュニティをめぐる現状や自らの活動についての話。
- 3) 下條明博氏…本事業の実行委員長であり、「下條くだもの店」経営者。「アートの話」「果物店と商店街の話」「勝本浦（筆者注：下條くだもの店のある地域）の話」に分けアップされている。
- 4) 齋藤智之氏…寺江が現地滞在中に出演したラジオ局「壱岐FM」の開設者でありパーソナリティ。地域におけるメディアの役割について等。

これら「ケーマゲヒンマゲして考えたこと」「今日の」「互いに見る・インタビュー」の3つのシリーズがホームページにおける主要なコンテンツである。

いずれの内容にも不明瞭さに対する寺江の執念とも呼ぶべき眼差しが伺える。すぐには分からないものや、単純に割り切れない物事に対して粘り強く向き合い、しつこく思考する態度において寺江の姿勢は終始一貫している。

## ■ 現地滞在中の活動

滞在中の日々の活動については前項の「今日の」シリーズに記されている。限られた時間の中で、かつ年末年始をまたぐ滞在中で一定のアウトプットが期待される表現者の過密気味な活動の様子が日々刻々と伝えられている。

結果的には滞在中の活動の一定の成果として次項にある通り行事の提案という着地点に辿りついたわけだが、「今日の」シリーズを通覧すれば今回着地したプランに直接繋がる活動ばかりでなく、他にも多方面にわたる下調べや試行錯誤を重ねていたことが分かる。

寺江はそれらの記録の中でしばしば「恥ずかしい」と述べている。思想や文筆の専門家ではないのに多くの文章をしたためることへの気恥ずかしさと、プロジェクトが必ずしも順風満帆に進まず、着地点が見えない五里霧中の状態にあって手探りでもがきながら進めていることから、あれやこれやの試行錯誤の様子を焦りや不安も含め現在進行形で公開することへの気恥ずかしさである。

また寺江も述べている通り、この日々の記録および思考を記したホームページの総体をもって作品とみなされるのか、後述する活動の提案をもって作品とみなされるのか、必ずしも確信が持てず未整理なまま前に進むしかなく、その経過がときに苦悶とともに報告される。

このように活動が粛々と展開されつつも、先に

<sup>13</sup> <https://iki.plus100p.com/?cat=5> (2020年2月10日閲覧)

指摘した不明瞭さに対する眼差しは寺江自身の思考や活動に対しても批判的に向けられつづけており、それがしばしば恥ずかしさの告解となって表れるのだが、全体を俯瞰して見るならば寺江はこの恥ずかしさの引き受けこそが表現者としての責任だと考えていることが分かるだろう。

### ■行事提案「芦辺浦 二〇三〇年一月吉日 三味線通り」

寺江の今回の滞在の一つの成果として、芦辺地区について「三味線通り」という行事の提案をするという着地点が示された。以下、寺江の説明から引用する。

壱岐市芦辺浦には、芦辺祭やちんちりがんがんと呼ばれる祭があります。この祭りは昔は地域住民による演劇があったり、今でも残されている船を家に入れて一晚過ごす風習があったりと特徴的な大がかりな要素がいくつもあります。そのような風習は時代と共に変化し、今に合う形で持続してきました。この祭のお囃子には三味線が入っており、これも特徴的だと言えます。他の地域ではあまり見ることはありません。昔。この祭囃子の存続のために、三味線教室が立ち上がったことがありました。当時は時々、街の通りから三味線の音が聞こえていたと聞きましたが現在は、その三味線教室はありません。街から聞こえる音は、きっと子ども達の成長や私たちの記憶にも影響を与えている事でしょう。<sup>14</sup>

以上に述べられたような2020年現在の芦辺地区の状況をふまえ、寺江の考える「三味線通り」という行事が10年後の2030年に同地区で行われることを思い描きながら提案用のイメージ映像（下図）が作られ、その上映会には老若男女、地域住民約20名が集った<sup>15</sup>。



「三味線通り」と名付けられた行事に関する具体的な提案は寺江のホームページに記されている。

三味線通り行事の仕方。

1. 内容に賛同できる方々で行う。
2. 賛同者は決められた時間に自宅で三味線の練習をする。
3. 自宅が難しい場合は、どこかに集まって練習をしても良い。
4. 練習時は通りから音が聞こえるように配慮する。
5. 賛同者は皆で三味線を弾く時間を決め、どこでいつ音になるかを考える。なるべく同一時間にいくつかの場所で音になるようにデザインしたほ

<sup>14</sup> <https://iki.plus100.jp.com/?p=973> (2020年2月10日閲覧)

<sup>15</sup> 「芦辺浦 二〇三〇年一月吉日 三味線通り」上映会、日時：2020年1月13日（月祝）10～11時、会場：Aカフェ（芦辺浦住民集会所内）

うが、より三味線通りの雰囲気が現れやすい。

6. 時間と場所が決まれば、各所に三味線通りという行事をすることをお知らせする。他のイベントとの連携で行うことができれば、より効果的に周知できる。<sup>16</sup>

映像とテキストにより構成されるこの提案が地域の中で今後どのように展開されていくのか現時点では分からない。

## ■環境・経済と芸術文化の非対称

寺江自身は今回の提案を地球環境の現状と結びつけながら説明している<sup>17</sup>。地球規模での環境の変化を受け、壱岐島周辺の海でも急速に海藻が減少し収穫物が極端に減っている状況があり、漁業関連の経済活動は大きな打撃を受け、その変化がひいては祭をはじめとする地域の文化芸術活動にも大きな影響を及ぼしている状況がある。「自然環境が変わり、生活（経済）が変わり、文化が変わる」、このマクロからミクロへの流れに棹差すべく、寺江は今回の提案において芦辺地区の三味線をめぐる状況に注目するという一つの着眼点を示した。これは地域における文化芸術活動の状況の変化を注意深く捉えることから経済や環境の問題を捉えなおす視点、つまりミクロからマクロを考える視点を人々に促すものといえるだろう。

この寺江の視点は壱岐市がSDGs<sup>18</sup>関連の施策に積極的に取り組んでいることとも無縁ではない<sup>19</sup>。寺江の提案からは環境や経済をめぐる一連の施策にもっと文化芸術からの視点を意識すべきであるという含意も読み取れよう。より踏み込んで言うならば、文化芸術の視点を意識するとき、それは文化芸術関連の施策に対して、環境分野・経済分野の施策と同じく、長期的なビジョ

ンと然るべき予算を講じるということを意味している。地球規模で展開されるSDGs関連事業のビジョンとそれに伴う予算規模に比して、今回の滞在を通じて寺江が身をもって示した我が国の文化芸術分野の「ケーマゲヒンマゲ」状況の非対称ぶりについて我々はもっと意識し、議論する必要があるだろう。

## ■終わりに

前項にて寺江のプロジェクトをめぐって浮かび上がる環境・経済分野と文化芸術分野の非対称について巨視的に述べたが、美術の文脈から捉える本プロジェクトの意義、特に公的機関が地域で展開する文化芸術事業をめぐる近年の動向に照らしつつ本プロジェクトをどう解釈するか等については本稿では論じきれなかった。この点についてはいずれ稿を改めたい。

<sup>16</sup> <https://www.terae.info/ashibe-ivent/>（2020年2月10日閲覧）

<sup>17</sup> <https://iki.plus100p.com/?p=973>（2020年2月10日閲覧）

<sup>18</sup> 2015年9月に国連サミットで採択された「持続可能な開発目標」（Sustainable Development Goals）。2030年を期限として具体的な目標と取り組みが定められている。

<sup>19</sup> 壱岐市は2018年6月に内閣府より「SDGs未来都市」および「自治体SDGsモデル事業」に選定された。その背景の一つに2015年からの富士ゼロックス株式会社・富士ゼロックス長崎株式会社との連携事業「壱岐なみらい創りプロジェクト」があり、寺江の2019年12月～2020年1月の滞在に際しては本事業の関連施設であるシェアハウスを利用した。